Field + MUSEUM

ミュージアムをフィールドにして歴史に思いを馳せる

ミュージアム・オブ・ジュラシック・テクノロジー（LA）

小森真樹
こもり まさき / 武蔵大学

**「ミュージアム研究」という学問がある。
ミュージアムを通して世界を見る方法だ。
世の中には山ほど変わったミュージアムがある。
「なんだこれ?」と思うような所でも
実は研究の対象になる。
一風変わったミュージアムを訪れ、
歴史の記憶に思いを馳せてみよう。**

ミュージアム「を」研究する

ミュージアムとはいかなる場所だろうか。「美術館」や「博物館」と聞くと何を想像するだろう。古来伝わる宝物や、インパクトあるアートを展示している空間だろうか。なかには、ラーメン等の飲食店が集合するテーマパークを思い浮かべる人もいるかもしれない。

筆者が専門とする「ミュージアム研究」は、ミュージアムという場所について様々な角度から研究をする分野である。筆者がフィールドにするアメリカのミュージアムをひとつ紹介してみよう。

16世紀デンマークの博物学者オレ・ワームの「驚異の部屋」。彼の死後、1654年に出版された『ワームのミュージアム』表紙図版より。

ミュージアム・オブ・ジュラシック・テクノロジー

ミュージアム・オブ・ジュラシック・テクノロジー（以下、MJT）は、ハリウッドにほど近いカルヴァーシティにある小さな博物館である。2時間もあれば30の展示室をもれなく見ることができる。1988年にデヴィッド＆ダイアナ・ウィルソン夫妻が創設した。洋の東西、時代の新旧を超えて各国から集めた一風変わった品々が展示されている。

展示物を見てみよう（右ページの写真）。「マイクロミニチュアの珍世界」は、人の毛髪を様々なモチーフに削り、裁縫針の穴の中に嵌め込んだ彫刻の展示だ。針にじっと目を凝らしてみると、異様に小さなナポレオン1世、ミッキーマウスや白雪姫だとわかる。「完全なる動物たちの人生」は、ロシアのロケットで初めて宇宙に旅立った犬たちの肖像画展。「蜂に言いなさい」は、科学的思考が普及する前の時代の治療法に関する解説。食パンにネズミを乗せて食べると子供のオネショに効くのだ、といったちょっとユーモラスな故事が紹介される。

一体何なんだこれは……？　飛び込みの客が目を丸くしているのをよく見かけた。

迷路の如く仄暗い通路、ブロードの絨毯敷、バロック調のティールームを備えた展示室に所狭しと収集品が並べられている。ルネサンス期の欧州では、王侯貴族が財産に任せて世界中の珍品奇物を蒐集したが、同館はそうした「驚異の部屋」の現代版とも称される（上の写真）。展示では、17世紀の「ルネサンス・マン」たる博覧強記の学者アタナシウス・キルヒャーが、発明品・収集品を驚異の部屋に展示していたことが紹介され、展示内容からも館長の狙いがうかがえる。しかし、同館の名称は「ジュラ紀の技術の博物館」という意味だ。そのコンセプトは「後期ジュラ紀に関する理解を公衆に広めることを目的とする博物館」だと説明されているのだが、恐竜や化石といった、ジュラ紀に関連する展示は一切見当たらない。扱わない理由も全く言及されていない。

ミュージアムで歴史を語り、記憶する

さて、一歩引いて考えてみよう。例えば、ミュージアムの歴史と機能について考えてみる。

MJT館内マップ（同館の公式カタログより）。

ミュージアムの外観。

＊写真はすべて筆者撮影（2011年3月）。

一階展示室の様子。奥は「角」展示。ある女性に生えた角状の毛髪標本が、ヘラジカや羚羊の角とともに並べられている。

マイクロ彫刻で彫られたディズニーのキャラクター、グーフィー。

「完全なる動物たちの人生」の展示風景。

夜尿症に効くネズミトースト。

あやとりの技術展。実物の他に、解説書のページを開いた上にホログラムのあやとり風景を投影している。

近代のミュージアムは、国民国家の成立に伴ってそれぞれが「私たちの歴史」を描くために整備されてきたという由来を持つ。つまり、貴重な宝物や珍しい物、また優れた科学技術を一箇所に集めて残し、国の豊かな文化や厚い歴史を示すことによって、他国に威厳を誇示する手段としたのである。ミュージアムは本来的に、歴史を記憶し後世に伝える装置なのである。

一見奇妙なミュージアムも「歴史の記憶」と思って見ると一味違う気持ちで楽しむことができる。MJTは、珍奇な逸話や迷信、民間信仰、神話、古臭くなった科学理論を「歴史」として後世に伝える。これらは、普通は「誰も気にしない些細な噂話」「過去には一般に真実と信じられていた事象」または「最新の科学的見地からは誤りのある理論」などで、いわゆる歴史博物館や科学博物館では光を当てられることも保存されることもない。つまり、このミュージアムでは、放っておくと誰にも知られないで埋もれてしまう、狂気や博覧強記といった、ある種の異彩を放つ知識が「記憶」されているのである。

歴史を語るということは、後世に残すことである。ミュージアムで歴史が残る。「歴史の記憶」という観点でミュージアムを見渡してみると面白い。何が残り、何が失われるのかを観察する事ができる。社会や人々の関心も見えてくる。例えば、アメリカでは、ハリケーン・カトリーナという2005年に起きた未曾有の大災害は、誰もが忘れ得ない歴史として語り継がれている。当地ニューオーリンズはもとより、全国のミュージアムで、被害者の本名、家族構成、市井の人々の証言や最期の様子などといった、被害者に関する生々しい情報の数々が驚くほど事細かに公衆に展示されている。社会で記憶を共有することでトラウマを乗り越えることに主眼が置かれているのである。一方、日本の災害展示では、物議を醸すおそれのある事象については被害者・遺族感情に配慮をして、積極的には見せない選択がなされることが多い。災害についてのミュージアムの語り・記憶を通して、社会が災害をどう見ているのか、また、「見せること」や「知ること」をどのような行為だと捉えているのかがわかるのである。このような視点でミュージアムを見て、社会を理解するのが、「ミュージアム研究」の醍醐味である。

アートとしてのミュージアム

最後に一つ種明かしをしよう（ネタバレ注意）。実は、展示物の中に館長がねつ造した展示物が紛れているのだ。敢えてその展示の名は明かさないが、ミュージアムショップでその展示について出版した書籍を販売までする徹底ぶりだ。つまり、「なさそうではあるが本当にあった」歴史のなかに、偽の歴史を紛れ込ませ、それによって、「正しい歴史と誤った歴史、残る歴史と残らない歴史は誰がどう決めているのか？」と問いかける仕掛けが隠されているのである。ウィルソン氏は、美術大学で学び、映画制作の現場を経験しつつ温めたアイデアをミュージアムで実現した。一種のトリックを仕掛けるアーティストとして、目にも脳にも愉しいこのミュージアムを創ったのである。